



令和6年度八頭町人権尊重のまちづくり講演会

～生きるということ～ 小説『あん』を通じた出会い

作家・歌手・明治学院大学国際学部教授 ^{すけがわ} **ドリアン助川** さん

講師紹介

作家、歌手、明治学院大学国際学部教授。1962年東京生まれ。早稲田大学第一文学部哲学科卒。放送作家を経て、1990年バンド「叫ぶ詩人の会」を結成。長野パラリンピック大会歌『旅立ちの時』作詞。小説『あん』は現在24言語に翻訳されている。2017年、同作がフランスの「DOMITYS文学賞」と「読者による文庫本大賞」など4冠を得る。『線量計と奥の細道』が日本エッセイストクラブ賞を受賞。近著に『動物哲学童話』『太陽を掘り起こせ』など

八頭町人権教育推進協議会、八頭町および八頭町教育委員会主催による、八頭町人権尊重のまちづくり講演会を6月30日(日)に開催しました。講演会にはメイン会場の中央公民館をはじめ、サブ会場の中央人権啓発センター、オンライン配信を含めて225名が参加しました。講師のドリアン助川さんは、ハンセン病問題を背景とした小説『あん』の作者で、小説が完成するまでの道のりと出逢い、そして生きる意味を独自の視点でお話しされました。講演の内容を一部ご紹介します。

小説『あん』はどんな物語？



小説『あん』は、1996年にらい予防法が廃止され、それまでハンセン病を発症したことで療養所に入所を余儀なくされた人たちが外に出られるようになった、90年代後半頃のお話です。人生のほとんどを療養所で過ごした、元ハンセン病患者の徳江さんは、どら焼き屋の雇われ店長であった千太郎と出会い、そこで働き始めます。実は、千太郎は罪を犯して刑務所に入っていた過去があり、自分の人生も仕事も愛せないような人物です。

やがて、徳江さんが作る館の美味しさは評判を呼び、店は繁盛しますが、徳江さんの指が曲がっていること、顔面が麻痺していることなどから、ハンセン病患者ではないかとの噂がたち、一気にお店に人が来なくなり、自分の病歴が原因だと考えた徳江さんは療養所に戻りますが、どら焼き屋で仲良くなった中学生のワカナは、ハンセン病について調べはじめます。そして、千太郎と一緒に徳江さんに会いに療養所へ向かい、そこで現実を見ることになります。

ハンセン病問題を背景としたこの物語のテーマは、「私たちが生きるこの意味」です。療養所で一生を過ごしてきた人も、社会で活躍してきた人も、人の命は平等だと伝える物語です。

ハンセン病とは



ハンセン病は「らい菌」という細菌に感染することで、皮膚と末梢神経が侵される病気で、外見に症状が現れますが、致死病ではありません。かつては「癩病」と呼ばれていましたが、差別的なイメージから、現在はらい菌を発見したノルウェーのハンセン医師の名前をとって、ハンセン病と呼ばれています。

聖書や仏教経典にも出てくることから、ずっと昔からある病気だということがわかります。

1943年に特効薬のプロミンがアメリカで開発されると、ハンセン病は不治の病ではなくなりました。しかし、問題は、1950～60年代に各国で患者の隔離が解かれていったのにも拘らず、日本では約50年間の対応が変わらなかったということです。弁護士等の力によってらい予防法が廃止されるまで、患者の絶対隔離は貫かれました。

らい菌は感染力が非常に弱く、潜伏期間が長いのが特徴です。大人にうつることはほぼありませんが、生後6ヵ月ごろの免疫がぐっと下がる時期に、らい菌が繰り返し鼻の粘膜あたりから入ると、キャリア(菌に感染しているが、発症していない状態)になる可能性があります。しかし、現代の環境で生活していれば、そこからまず発症することはありません。





物語を書こうと誓った



私は、特定の色の見分けがつきにくい色弱者の一人です。以前、色弱は障害の一つとして捉えられていました。私生活で困ったことはありませんでしたが、今でも苦い経験として残っているのは、就職活動を始めたときのことです。希望していたテレビ局をはじめ、映画制作会社、出版社、広告代理店などすべてが「色覚異常者受驗不可」となっていたのです。社会に出ることができない、排除されたと感じました。ハンセン病患者に心が引き寄せられたのも、この経験があったからかもしれません。

その後、自力で放送作家となり、ラジオ局の即席特派員、バンド活動などもやりました。深夜のラジオパーソナリティを任された時は、電話で中高生の悩みを聞き、時には公開録音でいじめなどの問題を深掘りすることもありました。語り合うと、「なぜ我々は生きているのか」「なぜ私たちは生まれてきたのか」という話にもなってきました。その時、中高生のほぼ全員が「僕たちは社会で役に立つために生まれてきた。社会の役に立たないなら生きている意味がない」と言い切ったのです。

大人は子どもに、社会にとって有用な人間になれとよく言います。これは立派な考えではありませんが、ある意味恐ろしい言葉でもあります。社会で役立つ人になれなければ、生きていく意味はないとも捉えられるからです。中高生の回答を聞いた時、私の中で一番最初に頭に浮かんだのが、ハンセン病問題でした。

私自身、当時はハンセン病について断片的な情報しか知りませんでした。が、「じゃあ、ハンセン病療養所に入った人たちは生まれてきた意味はないのか？ そんなはずはない」と感じました。当然、ハンセン病だけではなく、色々なハンデをもって生まれてくる人、事故にあったり病気になる人、年老いて若いころのように働けなくなる人など大勢います。その人たちは、生きていく意味がないのでしょうか。人は社会の役に立たなければいけないのでしょうか。

どんな環境に生まれた人でも、どんな運命を背負った人でも、この世に生まれてきたことの意味があるということ。物語にしよう、その時に誓いました。

回り道と出逢い



その後、執筆に向けて勉強とイマジェネーションに取り組みましたが、

結局10年間、私は書くことができませんでした。多くの本を読みましたが、当事者でもない自分が入り込む余地が無いように思いました。病気になったがために社会から排除されてしまった人たちのことを考えると、それはおかしいと怒りも覚えました。それと同時に、この病を患った人以外には書いてはいけなく感じてしまいました。

人生に希望も見いだせなくなっていた時、偶然小さなライブに来てくれた人がCDを買ってくれました。それが、元ハンセン病患者の方たちだったのです。その後、ハンセン病療養所に招待され、これまで読んできた本には書かれていないことを知るようになりました。その中でも、療養所の中で甘いものを作っていた製菓部の話は初耳で、偶然にもその時に製菓学校に通っていた私は、大きな衝撃と、これを自分が書かずに誰が書くんだという気持ちになりました。完成するまで何度も書き直しをしました。さらに、ハンセン病問題を当事者でもない人間が小説として書くという出版社のタブーに触れ、予定していた会社から出版を断られてしまいました。それでも、なんとか他の出版社から出せることになり、あつという間に重版、そして映画化へと進むことになりました。

世界を感じて受け止める

私は、誰もが生まれたことに意味があるということ。物語として書くことを誓いました。その答えは小説の最後に出てくる、徳江さんが千太郎とワカナに宛てた手紙に書いてあります。（※ドリアンさんによる手紙の朗読）

今日、八頭町に來た時、とても緑がきれいだと感じました。そうやって、風や木々や空などを感じる心は、みんなが等しく持っています。私は自分のまわりの世界を感じて受け止めるだけでも、生きる意味があると思っています。

講演会の感想

（アンケートから一部抜粋）

・ 生きるこの意味、新しい物事の捉え方を教えてもらった。自分の存在がなければ、この世はない、感じることはない。生きる意味を考える機会をいただいた。

・ 気負わずリラックスして、生活していこうと思いました。日々感じたことに意味があると、今一度確認していきたいと思います。